東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2007 年 10 月 26 日

文明・自然・ハレム

親愛なるムスリムの皆様。それぞれの人に知性があるように、文明にもそれぞれの「知」があります。人の知性の容量、その使い方、そのもたらすものがそれぞれに異なるように、文明におけるそれも、それぞれに異なります。

ある文明の知性について言及することは、その文明が、神と、人間と、自然における結びつきの順番をどのように把握しているかについて言及することです。ギリシア・西洋の文明と、イスラーム文明との間の根本的な違いはここにあります。

ギリシア・西洋文明においては、その順番は「人間－自然－神」となります。人が最も重要な要素であり、神は忘れられえる要素となっているのです。この考え方は、「無は無を生み出す」という概念に基づくものです。振る舞いは知識から道徳へと反映されます。ここでは人間が能動的であり、神が受動的なのです。神が与えるものは信託となり、信託である場合はあとでその勘定が問われます。神からむりやり取ると見なすなら、人は自然から取ったことになります。自然は、人間の支配の明らかな対象となるのです。

イスラームの知性においてこの順列は「アッラー－人間－自然」となります。」主要な要素はアッラーであり、アッラーは存在の源、中心、そして存在させるお方です。能動的であり、どこにあっても、いつでも、今、ここにあって存在されるお方です。この概念では、アッラーは無から存在を作り出され、振る舞いも道徳から知識へと影響していきます。この考え方において受動的であるものはありません。生命を持つもの、持たないものという絶対的な区別はありません。アッラーが絶対的な支配者であり、王であられるのです。誰もアッラーから何かを盗むことはできず、アッラーは望む者に信託として与えられます。自然もまた、アッラーがしもべたちの為に人間に与えられた信託です。人はご自身の為に創造され、自然は人間の為に創造されたのです。人はこの信託を裏切り、それに応じた結果を迎えたり、その信託を誠実に扱い報奨を与えられたりするのです。この知を体現された預言者ムハンマドは、しばしば、親友を訪問されるかのようにウフド山を訪問されていました。それに対して驚いた人々に、次のように答えられました。「そう、ウフドは一つの山である。しかし私たちはこの山を愛するし、この山は私たちを愛する。」また教友の一人は次のように伝承しています。「預言者と共に礼拝所から出たところでした。その時、降ってくる雨に向かって進まれ、服を雨に向けられました。私たちは何をなさっているのかと訊ねました。預言者は『この雨の、アッラーとの契約は私とのものよりも新しい。私もそこから効果を得ているのだ。』と答えられました。」

親愛なる兄弟姉妹の皆様。西洋の思想によるなら、飢えが普遍的であり、糧は不十分です。その為「より多くを求めよ」というスローガンのもと、種の遺伝子が組み替えられたり、生態系に干渉が行なわれたり、合成肥料によって土壌が疲弊させられ、やせ細ったりしているのです。私たちの信じるところによるなら、全ての子供は自らの糧を持って生まれてきます。

一部の人々はもはや、「虫がいるりんごでも、虫がいるマルメロでもいい、ホルモン剤が入っていたり、有毒であったりしなければ。」というような状態なのです。

クルアーンは、多くの箇所でイチジクやオリーブ、山や平原、天空や大地、夜や昼、単独のもの、つがいであるもの、走り去るもの、逃げ惑うものなど、非常に多くのものに対し誓いをたてています。これらは神聖なものが様々な事象と結びつくことを示します。

オスマントルコの人々は、イスタンブールのウスクダルにあるハレム地区を、マッカやマディーナの兄弟にあたる町と宣言していました。人々はそこにある木を切ることすら罪と見なしていました。

糧はアッラーによるものなのです。この糧は元々私たちの財産ではなく、偉大なるアッラーに預けられた信託です。信託に誠実であるための最も重要な努めは、全世界を「ハレム」、すなわち尊敬に値する、という状態にすることなのです。